

ふたりの女の子と一人の主

coco77

宿屋「東のうみどり亭」

ベル：東のうみどり亭の主。町一番の発明家。

エファ：人形少女。東のうみどり亭で働いている。

「ベールー」とエファがいます。そうです。ベルは、エファが大事にしていた、プディングを食べてしまったのです。

「あはは・・・食欲に負けて、つい・・・」とベルは謝ります。

「今日一日じゅうかけて、焼いたのよ！ とっても美味しそうだったから、あとで食べようと思ったのに！」とエファはふんがいします。

「まあ、まあ、お詫びもかねて、焼いて上げるから」

「ホント？」とエファ。

「その代り、手伝ってよね」そうです。ベルは料理音痴なのでした。

そして、プディングが焼きあがると、ふたりが目を離したすきに、今度はファーネが食べてしまったのです。

「エーファー」と飛び込んできたのは、ベルです。

「美味しいケーキが焼けたの！ いっしょに食べない？」と、ファーネも続いて、やって来て、

「ベルさんのお手製ではないから、安心して」と、いいます。

「むー、どうしたことよー」とベルはほっぺたをふくらませますが、本人にも料理音痴という自覚があるので、そのまま、にこっと笑うと、「ケーキどう？ ファーネと焼いたの！」といいます。

エファとしては、断る理由などないではないでしょうか？ こんな素敵な誘いなんですから。

さて、エファには、読んでいた小説があります。前世期のロシアの推理小説。これを、持っていこうとすると、「あー、だめだめ」と二人にいわれます。怪訝に思いながらも、ダイニングの椅子にすわると、そこでは、ベルとファーネが焼いた、とても、美味しそうなケーキが、たっぷりの蜂蜜といっしょに、盛り付けられているではありませんか？

これが、幸せでなかったら、なにが幸せだ。といえるのでしょうか？ わたしには、ちょっと想像が付きません。

「今日は小説を読みたいわね」とベルは目覚めると、独り言をいった。

そういった気分になることは、滅多にないことなのですが、今が、そのときなのです。

「新しくできた書店にってみようかしら」とベルは、朝の用事が済むと、買い物に出かけます。そして、その大きな書店で、編み物の本、機械加工の本、寸法の本、材料の本、そして、とっておきの最後に、小説を買うと、町の外にでました。

と、そこをとぼとぼと歩いていると、いつもの心地よい風とともに、潮風が漂うのでした。それは、海のそばの小道です。そして、そこから、宿屋「東のうみどり亭」までは「すぐそこ」

なのです。

さて、ベルが買った小説は、推理小説でした。ロシアの前世期の推理小説が欲しい。と、エファから頼まれていたのを思い出したのです。エファは外出先から、帰っていないようでしたので、ベルは先にそれを読んでしまうことにしました。

「カポーネン大佐の犯罪・・・か」とベルは表題を読み上げます。そして、ゆっくりと、ページに、目を通してゆきます。それは、とてもワクワクドキドキさせる話でした。

ベルは、この推理小説ならではの、ドキドキ感が好きなのでした。

と、エファとファーネが帰って来ます。みんな、荷物をもっています。

「あたしたち、本をいっぱい買っちゃった」とエファたちがいいます。すると、そこには、ベルが買った小説と同じ内容の小説があったのです。

「偶然ね」

「偶然かしら？」と三人は目を丸くします。

「返品無理ですよ？」「そうですね」みんな、そう思います。

ラジオつけますね。とエファがいう。すると、すぐに、ラジオがつけられます。美しい調べが、みんなが集まるロビーに、流れ出します。

こうして、今夜も東のうみどり亭の一日はゆっくりと過ぎてゆくのでした。